

スペインのバルセロナで「ピカソ美術館」を見聞し、感銘を受けました。私は絵画について全く無知であったため、ピカソの絵画は孫が描いた絵画のレベルしか理解していませんでした。

しかし、ピカソ美術館を見聞して、ピカソの天才的画家の意味及び天才的画家になるまでの成功のメカニズムを発見し、正に認識価値(意味を知って初めて良さがわかる価値)を取得しました。

その天才的画家になるまでの成功のメカニズムを解明すると次の通りです(六車流：流通理論)。

ピカソは基本的な描写力やデッサンは超一流の絵画技術を持っていた

ピカソは14歳から16歳の頃、すでに基本的なデッサンを全てマスターし、展覧会でも高い評価を得て、最高の賞を授与されています。

ピカソの画風はその後、幾度となく豹変し、最後には抽象画に至り、凡人では理解できない分野で高い評価を得ましたが、それは本来の画家としての基本的能力を天才レベルで持っていることが背景にあります。

ピカソは豹変画家として常に新しい創造的分野に挑戦し続けた

ピカソは7つのステップを歩んで高い評価を得るようになりました。それは「基本の時代」(1901年以前)、「春の時代」(1901年～1904年)、「バラの時代」(1904年～1907年)、「アフリカ彫刻の時代」(1907年～1908年)、「分析的キュビズムの時代」(1909年～1912年)、「総合的キュビズムの時代」(1912年～1918年)、「新古典主義の時代」(1918年～1920年)です。ピカソの画家としての絵画技法の変化は、常に過去の延長線上の変化ではなく、全く新しい分野への創造的挑戦の結果の変化です。それゆえに、豹変画家と呼ばれています。この豹変は2つの意味を持っています。一つは、画家としての絵画技法に新しい分野を導入し、新たな画風を完成させ、さらに挑戦しつづけ画家としての“器”を大きくしたということです。もう一つは、常に世の中の人々に対して新鮮なイメージを与え豹変を続けたことです。絵画技術の向上・創出と、斬新さの提供が、ピカソの絵画を七変化(7人分の天才画家)させたのです。

ピカソは参入障壁の高い異質分野を確立しました

ピカソが他の画家と比べて、決定的に異質性があり、参入障壁の高い分野を確立した絵画技法が「キュビズム」です。ピカソが創始者であるキュビズムとは、1つの絵画に複数の視点を組み合わせる絵画技法であり、ルネッサンス以来の「単一焦点による遠近法」を放棄し、複数の視点による対象把握と画面上の構築を試みました。この手法は、視覚上の革命的な美術動向と言われ、今までは絵画は一ヶ所の視点から描かれていたのに対し、様々な角度から見た物の形を1つの画面に描き、立体的に物体全体を平面上に表現します。そこには時間的経過の記録や、対象となる物体を原型に近い形でキャンバスに落とし込もうとする意図も込められており、遠近法を用いた従来のアカデミックな絵画に対して野心的な試みであり、ピカソの抽象的な絵画やピカソを著しく有名にしました。そのようなピカソの確立した独自分野がキュビズムであり、ピカソのみが見える分野を見抜き、独自の参入障壁の高い絵画技法を構築しました。

ピカソの絵画技法を客観的に評価する第三者の存在

どのような分野においても高い評価を得るためには第三者の高い評価を得ることが必要です。自分だけが高い評価をしても、第三者の評価が得られないと世の中に通用しません。ピカソも少年時代に単なる描写屋(見た通りに正確に描く)と言われ、展覧会でも高い評価を得られない時もあり、報われないこともありましたが、しかし、その後、展覧会で高い評価を得られるようになったのは、ピカソの絵画を単なる描写ではなく、画家としての高い技術力を認めかつ評価した第三者がいたからです。後のキュビズムの分野を創出した際も、多くの人が「何じゃこれ」と思う絵画を高く評価し、そのキュビズムの意義を理解し、理論化した第三者がいたからこそ、今日のピカソの評価があるわけです。

ピカソの成功のメカニズムを「基本技術の高さ」、「常に新しい分野への挑戦」、「異質性のある参入障壁の高い分野確立」、「第三者の評価」の4つのステップで分析しました。我々のSC開発・運営の成功のメカニズムに適用されるノウハウは、ピカソの天才画家へ上り詰めたメカニズムと共通している面がたくさんあります。